

金島書　海路

只うた

へかくて、順風時至りしかば、纜を解き、船に乗り移り、海上に浮かむ。さるにても、佐渡の島迄

は、如何程の海路やらんと、尋ねしに、水主答ふる様、遙々の船路なりと申し程に、

下へ遠くとも、君の御蔭に、漏れてめや、八島の外も、同じ海山。

上へ今ぞ知る、聞くだに遠き、佐渡の海に、老の浪路

下くり
の、船の行末。万里の波濤に赴くも、
唯一帆の道とかや。一葉の内には、千顆万徳の通

所あり。

こせさは
へ實にや世の中は、何に喻ゑん、朝ぼらけ、漕ぎ行

船の路も既、幾瀬の浪を越えぬらん。北海漫々

として、雲中に一島無し。東を遙に見渡せば、

五月雨の空ながら、その一方は、夏も無き、雪の

白山ほの見えて、雪まや遠く残らん。猶行末も、

旅衣、能登の名に負ふ、国つ神、鈴の岬や、七島の、

海岸遙かに移ろひて、入日を洗ふ沖つ浪、その儘、

暮れて、夕闇の、螢とも見る、漁り火や、夜の

浦をも、知らすらん。

上
へ
瓈く雲の立て山や、明け行天の礪波山、俱利迦羅
峰までも、それぞとばかり三越し路の、船遙々と

漕ぎ渡る、末有り明の浦の名も、月を其方の知る
べにて、浪の夜昼行船の、去ること速き、年の矢の、
下の弓張りの月も既、曙の波に松見えて、早くぞ、
爰に岸影の、爰はと問ば、佐渡の海、大田の浦に
着にけり、く。

〔口訳〕

かくして居る中に、風も順風になつて來たので、纜を解いて船
に乗り移り、海上に浮び出でた。それにしても、佐渡の島までは、
どれほどの海上の里程であるのだらうと尋ねたところ、船頭が
答へるには、遙々の船路だと申したので、

遠くとも君の御かけに洩れてめや八しまの外も同じうみ山

（たとひ遠い所でも、大君の御蔭に洩れるといふことは有るまい。

八島の外といつても、同じ海山であるのだ）

今ぞ知る聞くだに遠き佐渡の海に老の波路のふねの行する

（名を聞いてさへも遠い所だと思つて居た佐渡、その佐渡への海
路が、自分の老の年波を渡る舟の行く末であつたと、今こそし

みじみと思ひ知られる事である）

万里の波濤に赴くのも、ただ一帆の道であるとかいふことだし、一葉の舟には、千顆万徳の通所があるともいふ。昔人が「世の中は何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波」と詠じたのも、如何にもと思はれ、かうした船の旅も、既にどれほどの浪路を越したことであらう。北海は漫々として雲をひたし、見渡す限り一島の影もない。東を遙かに見渡すと、今は五月雨の空であるが、その処だけは夏もない白雪を頂いた白山がほのかに見えて、雪間はるかに残ることであらう。なほも進み行く彼方には、能登の名を持つた国つ神の、鈴に縁のある珠洲の岬や、七島の海岸が、遙かに視界を過ぎて行き、入日を洗つて居た沖の波も、そのままに黄昏れて、夕闇にもなれば、螢のやうにも見える漁火が、夜の浦を知らすかのやうである。さて、朝雲たなびく立山や、明け行く空にあらはれる礪波山、俱利迦羅の峰までも、それぞとばかりに遙かに見やり、越の海路をはるばると漕ぎ渡る末にあるといふ有明の浦をも、月のかかる其方にあるのでらうと思ひやりながら、夜となく昼となく漕ぐ舟の進みも早く、月日も早く過ぎ去つて、其月の下旬の頃にはもはや、

曙の波間から松が見え初め、早くもたどり着いた岸蔭で、此処は何処かと問うて見れば、佐渡の海の太田の浦に着いたのであつた。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 下巻』能勢朝次著